

丹波亀山藩における武士教育について

濱田 臣二

Regarding the Education for Bushi in Tanba Kameyama Feudal Clan
Shinji HAMADA

はじめに

近世には丹波・山陰地方の要衝地であった丹波亀山藩（以下亀山藩とする）は、現在では京都市に隣接した西側に位置し、人口約9万人の亀岡市となっている。古くは筏流しによって豊富な木材等を運んだ大堰川の水運は貴重であり、権力支配のための重要な地域であった¹⁾。

明智光秀が天正年間（1573～1593）に亀山城の築城に着手して、初代城主となり城下町を形成し、亀山藩発展の基礎を作った。明智光秀の死後は、実質的に豊臣秀吉が支配して江戸時代を迎えるに至った。

幕藩体制になってからは、岡部氏の入封に始まり、8代の形原松平氏まで継承された。当初2、3万石であった石高は、後に5万石に加増された。要衝地ゆえに譜代大名が配置され、長期統治を避けるためか、城主の交代が頻繁であった²⁾。寛延元年（1784）に松平信亨が城主となって以降、124年の長期政権によって、次第に藩政が落ち着いていった。

近世の武士教育においては、全国的に藩校を中心にして文武を修めることが肝要とされた。同様に亀山藩でも士民教化において、殊に儒学を柱とした教育に力が注がれ、文武兼修による教育が行われた。その中核となったのが藩校「邁訓堂」である。そこでの学問は、朱子学を中心に国内外の歴史や習字にまで至り、武芸は藩校の敷地内において、剣術・槍術・弓術の3種目7流派が教授された^{3) 4)}。



図1. 丹波亀山城絵図

そこで、本研究は近世における亀山藩校の邁訓堂に着目し、藩校の創建から閉校までを概観しながら、教育目的・方針、生徒数、文武教員数、各武芸教員数、教習科目、武芸流派の特徴等を考察し、亀山藩の武士教育の一端を解明することを目的とする。

なお、本稿では、概ね江戸時代の原型が成立する織田信長の上洛（1568年）から徳川慶喜の大政奉還（1867年）まで、すなわち、室町（戦国）時代末期・安土桃山時代および江戸時代をあわせて近世として取り扱った。

図1は、明治初期に亀山城の城郭の現状把握などのために城郭部のみを描いた城郭図であり、京都府立総合資料館の所蔵となっている。

1. 亀山藩の推移

亀山藩は、丹波国桑田郡亀山を藩庁として統治され、近世初期に明智光秀が築城した亀山城を中心に形成された城下町を基盤に発展してきた。光秀は初代城主として、亀山の基礎作りを行い、その後、豊臣秀吉が引き継いで支配を強化した。秀吉が亀山に積極的に関わった背景には、京都に隣接した地理的利点、大堰川の水運、豊富な木材、豊かな穀倉地など、積極的な支配に値すべきものが揃っていたと考えられる⁵⁾。

亀山城は、初代城主となった明智光秀が、天正4・5年（1576・1577）頃から築城に取りかかった⁶⁾。比較的低い山を中心として周辺の平地を城内と城下町に取り込んだ典型的な近世の平山城であった。天正8・9年（1580・1581）に築いたようであるが、それまでの築城の歴史でも、例を見ない早さで造り上げたといわれる⁷⁾。その後、30年くらいかけて第三期工事まで整備され、慶長15年（1610）に我が国初の五重塔層型の天守完成をもって、完全に完成したものとされている⁸⁾。

明智光秀の死後、天正10年（1582）に豊臣秀吉は、織田信長の四男である於次丸（秀吉の養子となり羽柴秀勝）に丹波国を統治させ、実質的に亀山城主として配置した。

後には、徳川家康も天下普請によって亀山城を整備させるほど重視し、亀山城を拠点として譜代の藩を設けた。

亀山城は、明治6年（1873）国の方針として廃城となり、その後、京都の商人森川喜兵衛に買い取られ、明治10年（1877）9月17日に取り壊し作業が始まった。そうしたなかで、人々に惜しまれながら解体され、払い下げが行われ

ていった。解体されたものの中で、天主の上にあった貴重な鯰瓦は、現在京都府立医科大学の所蔵となっている⁹⁾。建物・門の一部は、現在の建物に遺構として残され、亀山城の面影が伝えられている。

図2は、元亀山藩士である美田村顕教が明治初期に撮影した写真である¹⁰⁾。現存しない亀山城の姿を鮮明に写しており、亀山城の歴史を知るに貴重な史料である。顕教は嘉永2年（1849）に生まれ、10才で天道流剣術を学び、他にも様々な武芸を学んだ。明治・大正時代には天道流薙刀術師範として活躍し、女子武道教育の先駆けとなり、薙刀術の普及・発展に尽力した人物である。昭和6年（1931）に83才で没した¹¹⁾。

大正8年（1919）には、荒廃してしまった亀山城の敷地を宗教法人大本の教祖である出口主仁三郎によって、再び買い戻され整備が行われた¹²⁾。現在でも大本の管理によって、亀山城址として敷地が整備され、当時の石垣等が一部保存されている（図3）。

亀山藩は前述したように、要衝地ゆえに当時の有力者の目に留まり、明智光秀の築城以降、近世初期には支配権力の変化が著しかった。幕藩体制の初期には2、3万石の支配地であったが、中期以降は5万石となってそれが定着した¹³⁾。代々譜代大名によって統治されており、幕府の方針から任期も比較的短かったが、寛延元年（1748）の形原松平氏の入封後に長期となり安定した。

慶長14年（1609）岡部氏（13年）の入封に始まり、大給松平氏（14年）、菅沼氏（15年）、藤井松平氏（39年）、久世氏（11年）、井上氏（6年）、青山氏（47年）と続き、最後の形原松平氏（124年）で明治維新を迎え、廃藩置県となり、藩政269年の幕を閉じた¹⁴⁾。

明治2年（1869）版籍奉還によって藩知事に任命された松平信正が、伊勢亀山（現在の三重県亀山市）と混同されやすいとして、亀山から亀岡へと改称し、その名は現在に至っている¹⁵⁾。現在、京都府の南丹地域に属する亀岡市として人口約9万人、京都市・宇治市に次いでいる。

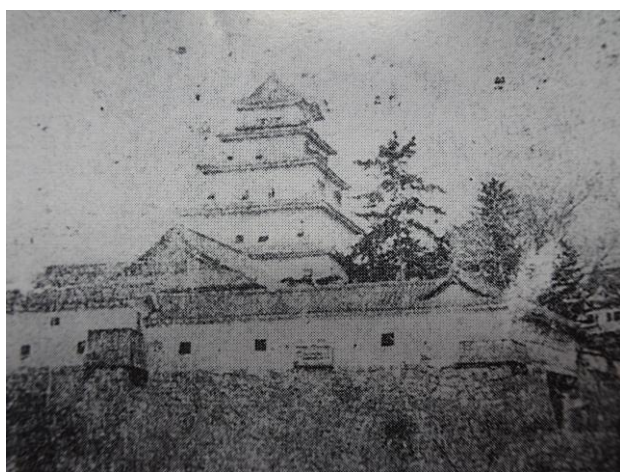


図2. 明治初期の亀山城



図3. 現存する亀山城の石垣



図4. 保津町第五区会議所



図5. 現在の千代川小学校正門

図4・5は、亀山城から移築された貴重な遺構の一部である。図4は、現在の保津町第五区会議所である。奥の建物は亀山城三の丸御殿の玄関部分が移築されたもので歴史的価値が高いと評価されている。

図5は、現在の亀岡市立千代川小学校の正門であり、明治13年（1880）の小学校改築の際に寄贈されたものである。乗馬にでも往来できるほどの高さがあり、長さも加え威圧感がある。これらの遺構とともに、丹波亀山の歴史と精神を次世代に脈々と受け継ぐ必要性を強く感じる。

2. 亀山藩の教育

（1）学校の始まりと藩校邁訓堂

延宝8年（1680）に丹波国篠山藩を受封した二代藩主康信は、「・・・初メテ略論語ノ義理ヲ理解スル者ニアラザレバ、郡奉行・大目付以上政務ニ与カル職ニ任ズルヲ得サルノ制ヲ定ムト云¹⁶⁾」とあるように、論語の義理を理解できる者にしか、郡奉行・大目付以上の政務にあたらせない制度を定め、儒学教育を推進した。

旧亀岡藩の学制沿革を報告した『旧亀岡藩学制沿革取調書』に「旧亀岡藩ノ文教ハ藩主式代松平康信篠山受封ノ時延宝伝度ニ起原スト雖、当時ノ記録甚簡約ニシテ其事跡ヲ詳ニスル能ハズ、蓋シ初メテ学校ヲ創立セシハ藩主五代松平信庸ノ時ニ在ルカ如シ、信庸元禄年度、儒者松崎祐之ヲ京都ヨリ召シ親ラ心ヲ文学ニ潜メ、且藩士ノ子弟ヲ鼓舞シテ文教ニ励精セシムト云フ¹⁷⁾」の記述がある。したがって、亀山藩における体系的な教育の起源は、松平信庸の元禄年間（1688～1704）であり、当時丹波篠山城主であった信庸が儒者の松崎祐之（蘭谷）を京都から招いて学校を設立し文教を奨励したことに始まる。その後、寛延元年（1748）に6代藩主信岑の丹波亀山移封と共に学校を移建し、宝暦11年（1761）には皆川淇園を招いて教学顧問とした。

文政7年（1824）に「藩主十一代松平信豪ノ時、初メテ学校内ニ文芸・武芸ノ各教場ヲ設ク、文芸分テ四教場トス、曰ク、講義所、邁訓堂ト号ス、曰ク、句読及数学所、広徳館ト号ス、曰ク、習字所、鉄門館ト号ス、曰ク、習礼所邁訓堂ヲ兼用ス、武芸亦分テ五教場トス、曰ク、中条流剣術場、曰ク、丹石流剣術場、曰ク、天道流剣術場、曰ク、真心流槍術場、曰ク、空伝流槍術場、曰ク、日置流大蔵派雪荷派弓術場、是レナリ、但シ馬術・柔術・砲術及練兵・遊泳等ノ武技ハ別ニ演習所ヲ設ケ学校範囲ノ外ニ置ク¹⁸⁾」とあり、約1500坪（約5000㎡）に藩校を拡張し、文武兼修のための学問所や道場を設けた。

主となる講義所を邁訓堂とし、句読・数学所を広徳館、習字所を鉄門館とした。習礼は邁訓堂を兼用とした。藩校の敷地内にはこれらの学問所の他に、剣術・槍術・弓術の武芸稽古所も建てた。馬術・柔術・砲術・遊泳等は敷地外に建てられたとあるが、それについての史料が見当たらず詳らかでない。

徳川幕府の儒学による文治政治は、寛永7年（1630）に江戸忍ヶ岡に学問所（昌平坂学問所）を創立したことに端を発する。全国的に藩校が設立された時期については、寛文～貞享年間（1661～1687）4校、元禄～正徳年間（1688～1715）6校、享保～寛延年間（1716～1750）18校、宝暦～天明年間（1751～1788）50校、寛政～文政年間（1789～1829）87校、天保～慶応年間（1830～1867）50校、明治元年～4年（1868～1871）36校、年代不明4校の合計255校といわれる¹⁹⁾。我が国の藩校数については諸説あり、多いものでは280校²⁰⁾、さらに江戸時代を通じて明治4年（1871）の廃藩置県までに225校が開設されたとの研究²¹⁾もある。

全国的な創建時期からすると、邁訓堂は150番目から160番目くらいと考えられ、我が国での藩校設立の流れに乗っているものの、比較的遅かったといえる²²⁾。また、近世初期には9校、中期57校、末期156校が建てられ、殊に寛政から文政年間の40年間は最も多い87校が建てられた²³⁾。この頃以降の藩校の激増は、単に幕府を背景とした影響だけでなく、近世中期以後の崩れた諸藩の財政を立て直し、武士生活の窮迫を打開する方策として、優れた政務担当の人物を育成するためでもあった²⁴⁾。

藩校での文学教育については、「教科用書ハ四書五経・通鑑綱目・温史・綱鑑易知録・大日本史・日本外史・皇朝史略・十八史略・文章軌範・八大家文集等ナリ²⁵⁾」とあるように、朱子学派註解を用いた儒学を中心に国内外の歴史から習字に至るものであった。

武芸稽古所は、剣術（中条流・丹石流・天道流）、槍術（真心流・空傳流）、弓術（日置流2派）の道場が建てられた。講義所は邁訓堂と名づけられたが、その由来については詳らかでない。図6の邁訓堂の扁額は、文化9年（1812）松平定信の書と言われ、現在は亀岡小学校の校舎入口に飾られている。図7は、現在の亀岡高校敷地にある邁訓堂跡の石碑とその説明文である。



図6. 邁訓堂の扁額（亀岡小学校所蔵）



図7. 邁訓堂跡の石碑（左）、説明文（右）

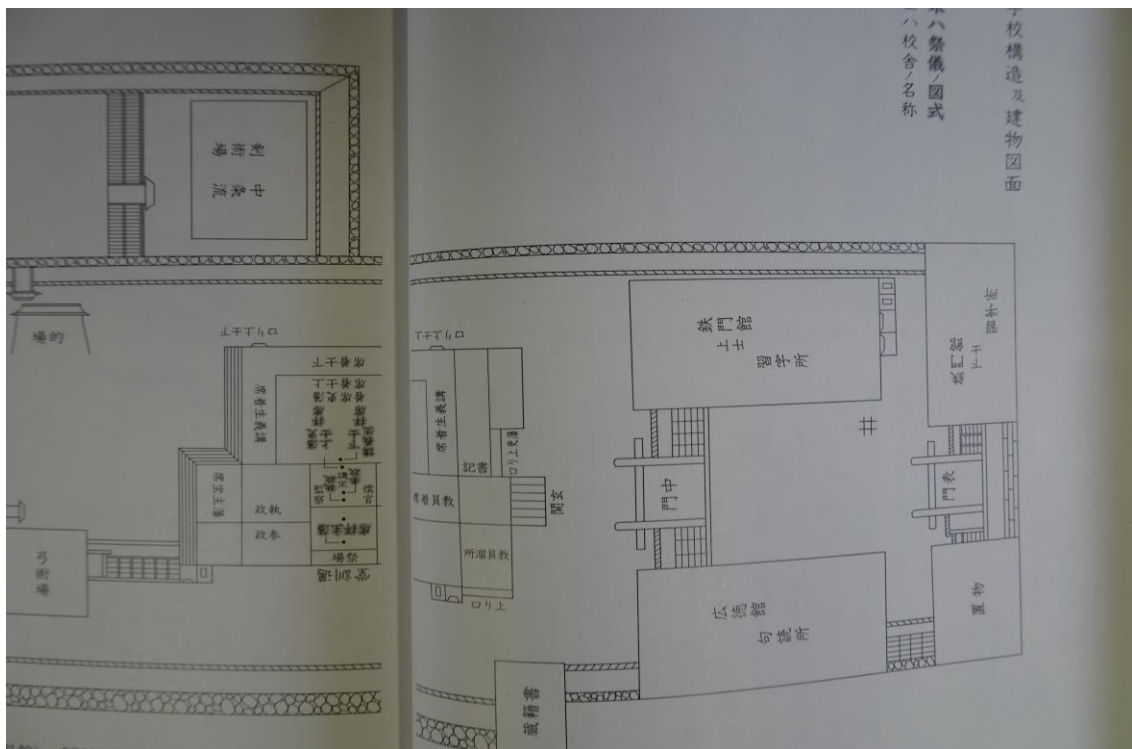


図8. 邁訓堂の見取り図²⁶⁾

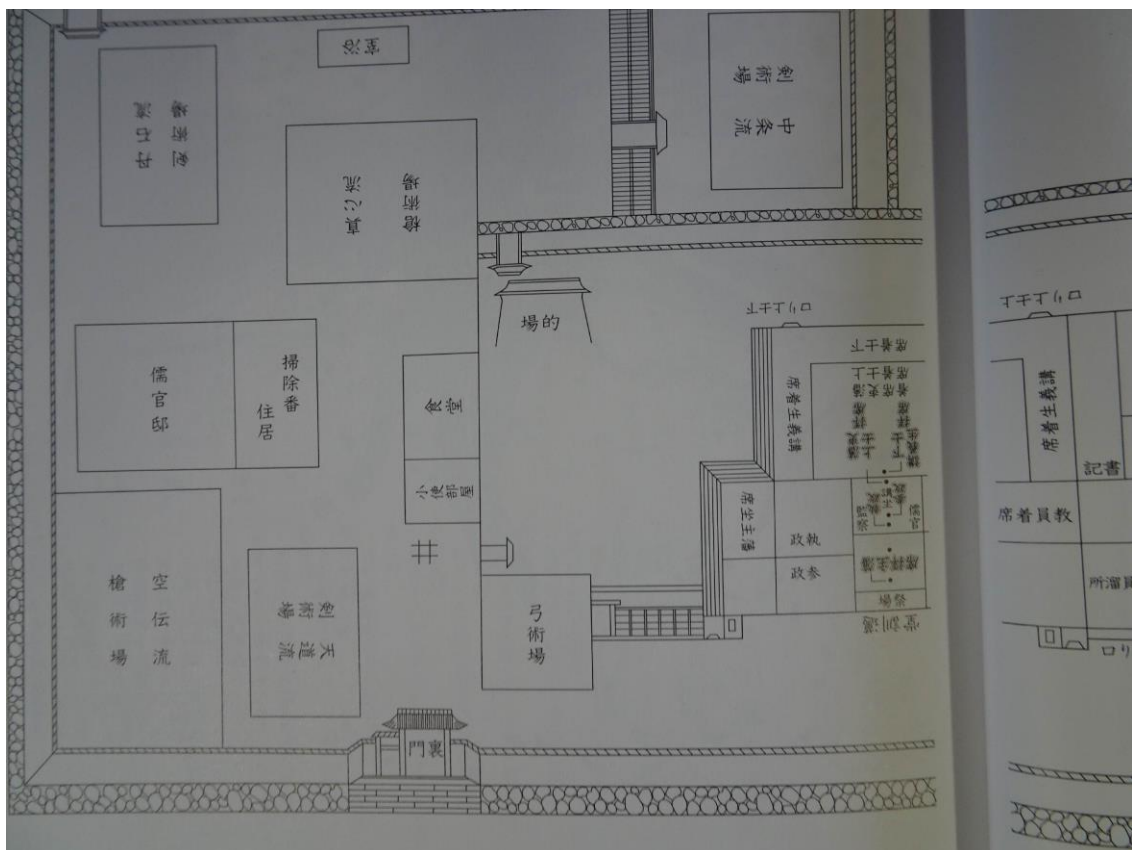


図9. 武芸稽古所を中心にした見取り図²⁷⁾

（2）就学年齢

生徒の就学年齢については、「生徒学習ノ期限ハ、八歳ヲ就学期トシ二十一歳ヲ退学期トス、・・・²⁸⁾」とあり、8歳から21歳まで在学させ、文武兼修であり、修行不足の場合には家禄を削減される制度になっていた²⁹⁾。

他藩と比較すると、同時期に開校した他藩は下記のとおりである。宮津藩8、9歳～20歳、小倉藩8、9歳～12、13歳、中津藩7、8歳～制限なし、加賀藩15歳～23歳、薩摩藩8歳～21、22歳であった³⁰⁾。このことから、亀山藩では、比較的長い13年間の就学期間が設けられていたといえる。

（3）生徒数

亀山藩校では生徒数は300人であり、その内訳は句読生約200人、講義生約100人であった。年齢による段階式の学習ではなく、入学当初から句読生と講義生の課程に分けられていた³¹⁾。

他藩と比較すると、加賀藩（102万石）・薩摩藩（77万石）・中津藩（10万石）であり、いずれも藩校の生徒数は約300名であった³²⁾。当時の各藩の石高数から考えても、亀山藩（5万石）は生徒数が多く、教育に対する熱心さがうかがえる。

（4）邁訓堂での稽古場

邁訓堂での武芸教育は、主に敷地内の稽古場で行われ、馬術・柔術等は敷地外の稽古場で行われた³³⁾。図8は、邁訓堂を中心とした見取り図で『旧亀岡藩学制沿革取調書』のなかにある原図をもとにして、作図されたものである。図9は同じく、武芸稽古所を中心にした図を拡大したものである。

各武芸流派の稽古場の広さは詳らかでないが、剣術（中条流・天道流・丹石流）・槍術（真心流・空傳流）・弓術（日置流雪荷派・日置流大蔵派）の稽古場が占めていることから、亀山藩ではこれらの武芸が特に奨励されていたと考えられる。

（5）文武教員数

図10は、各藩の文武教員数について比較したものである。亀山藩の文武教員数については、文学教員27名・武芸教員7名であり、文学教員は武芸教員の約4倍の人数であった³⁴⁾。

同様に他藩と比較すると、小倉藩の文学教員13名・武芸教員30名、中津藩の文学教員22名・武芸教員22名、加賀藩の文学教員45名・武芸教員68名であった³⁵⁾。当時、全国一の石高であった加賀藩が圧倒的に多く、亀山藩は最も少なかった。亀山藩では、教授された流派が少なかったことが影響していると考えられる。

（6）各武芸教員数

図11は、各武芸教員数の割合について比較したものである。亀山藩は、剣術教員（4名）、弓術教員（2名）、槍術教員（1名）の順であり、約半数が剣術、弓術が3割強、槍術が1割強で圧倒的に剣術が多かった³⁶⁾。

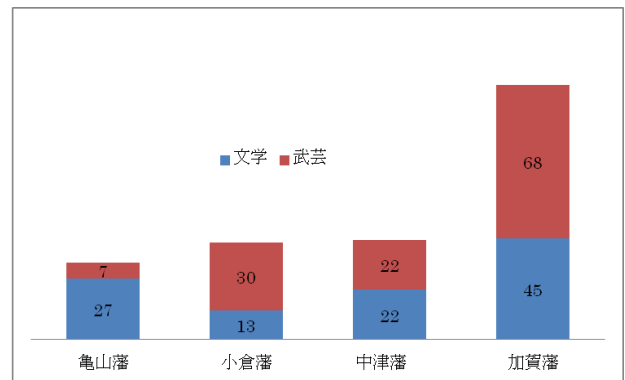


図10. 文武教員数の比較

他藩と比較すると、小倉藩と中津藩は、割合には差異があるものの8武芸種目の指導者が配置されていた。両藩において、最も多かったのは剣術で、中津藩では次いで槍術、小倉藩では柔術であった。また、加賀藩は、5種目しか配置されず、剣術が最も多く、次いで馬術の順であった³⁷⁾。

ちなみに邁訓堂が創建された文化・文政（1805～1829）年間における全国の武芸教員の割合は、剣術31.2%、槍術16.3%、馬術11.3%、柔術10.6%、兵学10.6%、砲術9.9%、弓術7.1%、水泳2.8%、薙刀1.4%であった³⁸⁾。剣術3割強、槍術2割弱と約半数を占め、亀山藩は剣・弓・槍の順であるが、ほぼ同様の傾向を示した。

藩校を全国的にみると、剣術教員が絶対的に優勢で全体の3割に近い28%を占めている。以下、馬術（15.13%）、砲術（14.25%）、槍術（12.5%）、柔術（10.03%）、弓術（9.32%）、兵学（7.4%）の順になっている。これらの割合は、江戸時代から明治時代にかけて、同様の傾向で推移していくが、砲術教員が、天保（1830）以降から著しく増加し、万延・慶応年間（1860～1867）には最多となった³⁹⁾。これは、国防のための教育によるものであると考えられ、邁訓堂は全国的傾向と比較すると、武芸種目が少なく、剣術が半数を占めており、剣術優位であったことがうかがえる。

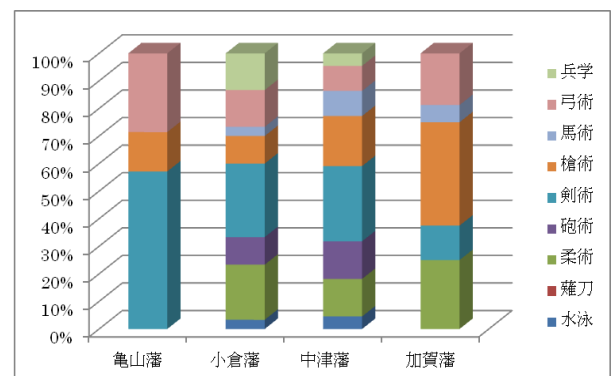


図11. 各武芸教員の割合

2. 亀山藩で行われた武芸流派

近世の亀山藩では邁訓堂を中心に武芸教育が行われ、敷地内には剣術・槍術・弓術の稽古場が設けられ、3種目7流派が教授されていた。敷地外でも教授されていたようであるが、資料が乏しく詳らかでないため、本稿では邁訓堂敷地内で教授された武芸について取り上げた。図12は、亀山藩の武芸流派に関する記録である⁴⁰⁾。

各流派の歴史については、『武芸流派大事典⁴¹⁾』『武術双書⁴²⁾』『日本武道史⁴³⁾』『日本武道大系⁴⁴⁾』『藩史大事典第5巻近畿編⁴⁵⁾』を参考に記述した。

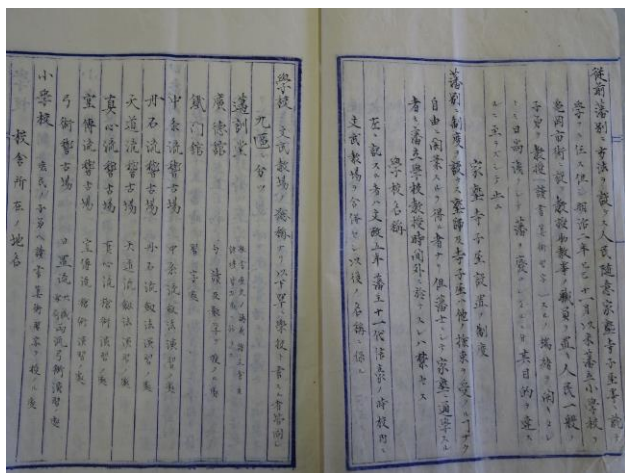


図12. 藩校・武芸稽古所に関する記録

(1) 剣術

①中条流

別名中条流平法ともいう。流祖は中条兵庫頭長秀である。中条出羽守判官頼平による中条家流の流れを汲んでいる。出羽守景長の二男であり、兄の出羽守時長が建武元年、奥州に所領を得たので、文和3年(1354)に父景長を継ぎ、挙母城主として三河の所領三万七千貫を相続した。延文から康暦にかけて歌人として現れ、守護・恩賞方・寺社造営奉行・評定衆を歴任した。

中条家流を学びながら、念流の大家である慈恩または、その師寿福寺神僧栄祐から念流刀術・槍術を学んで、創流したといわれる。晩年は剃髪して沙弥元成といい、挙母に長興寺を開いた。至徳元年(1384)3月3日に死去した。

亀山藩では、中条兵庫助、2代目甲斐豊前守、3代目大橋勘解由左衛門、富田九郎右衛門、富田越後守、山崎左近将監、山崎将監、山崎与左衛門、加藤源兵衛、山崎兵左衛門へと伝承された。その他には、若狭小浜藩、加賀藩、越前福井藩においてもそれぞれ伝承されている。

②天道流

別名天流ともいう。流祖は斎藤伝鬼房勝秀である。常州真壁郡新井手村(現在の茨城県筑西市明野)の出身である。塚

原ト伝に新当流を学び、その後鶴岡八幡宮に参籠して夢想を得て天流の創流に至った。天正9年(1581)11月21日、31才の時とされる。また、永禄9年(1566)10月19日という説もある。天正15年(1587)38才で死去した。

武者修行しながら上京し、参内を命じられて判官に叙任後は、入道して井手判官入道斎伝鬼房、伝輝房、伝記入道と称し、異装で天狗の様相であった。郷里真壁に帰ってから神道流の達人である霞という者と戦い、打ち殺してしまったため、後に仇討によって命を落とした。時に天正15年(1587)38才であった。

明治初期の指南役として下河原鉄之進が継承したが、亀山藩で盛んになった背景には、丹波篠山藩の伝系である目夏弥之助能忠からの継承による影響を受けたものと推察される。

③丹石流

別名天台東軍流ともいう。流祖は、永禄年間(1558~1570)の衣斐丹石入道宗誉である。西美濃十八将の一つに数えられた家柄で、遠祖の沼田法印は念流の祖である慈恩の高弟であったことから、宗誉も念流を学んでいたと考えられる。宗誉は、東軍大僧正に学んで創流した。技術的には、東軍流・新陰流・富田流を合わせたもので、荒々しい具足剣法であった。摩利支天の口伝であるから、当初は支口伝流と呼んでいたという説もある。

また、宗誉はこの流を加藤清正・織田三吉郎・小出右大夫・堀監物らの諸大名にも指南したため、山陰・山陽・筑前等に広まっていった。亀山藩では、岡本太郎左衛門に継承された。

(2) 槍術

①真心流

流祖は二本松藩士杉山大象軒、治左衛門当太である。二本松藩士の杉山紋右衛門吉周の子である。技術的には、関口柔心が槍に柔術を加えたものが根本とされる。

宝永2年(1705)29才の時に江戸に出て幕府の与力となった。享保4年(1719)三春藩(現在の福島県田村郡三春町)主に招かれて赴いた後、寛延3年(1750)12月25日に74才で死去した。

真心流は、三春藩のほか亀山藩・福岡藩・宇都宮修道館・大洲・柳川等でも継承された。亀山藩では幕末に西郷又助、明治初期には西郷八大夫に継承された。

②空傳流

丹波亀山藩。師範に西郷又助があったという記述があるのみで、流祖や伝系等は詳らかでない。真心流と同様に師範に西郷又助の名前があることから、彼が空傳流を創流し、両流ともに教授していた可能性がある。明治初期の指南役には今泉彦左衛門という記述がある。

文政7年(1824)に真心流槍術場、空傳流槍術場が造られたことから、両流ともに亀山藩では盛んに行われていたことが推察できる。

(3) 弓術

① 日置流雪荷派

流祖は日置流の流れを持つ吉田六左衛門重勝である。吉田流2代目の吉田重政の四男という説もある。入道して方睡・豊睡と名乗り、雪荷と号した。後年、京都に移住して弓術修行に専念し、生涯仕官することがなかったが、細川幽斎の恩顧を受け天正16年（1588）に75才の老齢で丹後田辺城（現在の京都府舞鶴市）に招かれて滞在した。その後、天正18年（1590）11月11日に77才で死去した。六左衛門は射術だけでなく、製弓にも長けていた。六左衛門の子孫は、後に藤堂藩（現在の三重県津市）に仕えた。

亀山藩では、明治初期の指南役として及川兵馬とある。

② 日置流大蔵派

流祖は日置流の流れを持つ吉田大蔵茂氏である。吉田左右衛門業茂の三男で、初名を合力、号を木反という。弓術のほか馬術・剣術・砲術を学び、書も秀でていた。

当初は父・兄と共に唐津で修行し、その後兄と京都に行き、山科の片岡道に寓して共に古伝を正した。遠矢・差矢の法を制し弓矢の製作法も工夫した。

関白豊臣秀次に仕えていたが、文禄4年（1595）秀次が自害してからは、加賀前田家に仕えて千石を得た。正保元年（1644）1月21日に57才で死去した。

亀山藩では、明治初期の指南役として下河原弥次兵衛とある。亀山藩のほか、加賀藩・土佐藩・会津藩・松代藩にも継承された。

上述のとおり、亀山藩では剣術3流派、槍術2流派、弓術2流派、馬術2流派の合計3種目7流派の武芸が行われていた。

それぞれの流派が、亀山藩に導入された時期については、史料が乏しいため詳らかにできないが、調査した史料から検討した各流派の創流時期を推察して考察した。

なお、創流された明確な年代が史料に記述されていない流派については、流祖の生年・没年および修業歴等から創流時期を推定した。

亀山藩校で教授された流派は、3種目7流派であり、なかでも剣術が3流派と約半数を占め、特に盛んに行われていた。

『家元の研究⁴⁶⁾』によると、武芸流派の分派発達の特徴については、以下の四つに分類される。

- ① 近世以前に創流され、その後の流派の大きな源流になったもの
- ② 近世以前に創流されたが、後代に大きな影響を与えなかったもの
- ③ 近世初頭に創流され、後代に影響を与えなかったもの
- ④ 18世紀中葉以降、流派活動の安定した後に、代表的な数流の長所を取捨総合して創流したもの

亀山藩では、3流派が①の分類に属し、近世以前に創流され、その後の源流となった流派が約半数を占めていた。次いで、近世以前に創流されたが大きな影響を与えなかった流派

が多かった。上記の分類をもとにすると、亀山藩で教授された武芸は次のように分類される。

① 中条流、日置流雪荷派、日置流大蔵派 [3流派]

② 天道流、丹石流 [2流派]

③ 真心流 [1流派]

④ 空傳流 [1流派]

流派の創流時期については、家光晩年の頃、それまでの総合武術から個性化した流儀ができあがる頃を「第一期」とすると、元禄太平の武芸の停滞期で形式化した時代を過ぎて幕府の武芸奨励があり、各藩が藩校を建立した時期を「第二期」新流派成立の時代といっている⁴⁷⁾。

亀山藩で教授された流派は、「第一期」新流派成立の時代に創流された流派がみられず、近世以前に創流され、その後の源流になったものが多かった。また、「第二期」の末期であるが、空傳流の1流派だけが創流されたと推察される。

本来、流派の成立には、天才的な人物の出現、技法が非常に高度であること、技術体系、教習過程、伝授方法等の形態を持っていることが必要とされる⁴⁸⁾。亀山藩では、これらの条件が十分に満たされず、新流派の創流に至らなかったと考えられる。

おわりに

近世における亀山藩では、藩士の子弟のために藩校邁訓堂を中心に教育が行われていた。邁訓堂には約300人の生徒が通い、儒学を中心とした教育が行われ、剣術・槍術・弓術などの武芸との文武兼修によるものであった。

就学期間は、8才から21才の13年間で比較的長かった。文学・武芸の教員の割合は、武芸教員の7名に対し、文学教員27名と約4倍であった。他藩と比較すると、武芸教員が少なく特徴的であった。各武芸教員数の割合は、約半数が剣術教員で占めており、剣術優位であった。

また、邁訓堂で教授された武芸は、3種目7流派であり、剣術・槍術・弓術であった。創流時期による分類では、近世以前に創流され、その後の源流となった流派、および近世以前に創流されたが大きな影響を与えなかった流派で約7割を占めていた。また、全国各地で新流派が派生していった近世末期に亀山藩では新流派の創流が少なかったことも特徴的であった。

以上、史料収集可能な範囲で近世における亀山藩の武士教育についての考察を試みたが、それらの一部を解明したに過ぎない。今後は、邁訓の由来、授業に関する詳細、敷地外で教授された武芸流派、各武芸の伝系や修行の実態等を明らかにすることが課題である。そのため、現在確認されてない資料発掘も重要である。新たな資料から、これらの詳細についてさらに解明されると、教育史や武道史の研究に大きく貢献するものと考えられる。

参考・引用文献

- 1) 亀岡市史編さん委員会編, 新修亀岡市史本文編第二巻, P263, P343, 2004
- 2) 前掲書1), P343, PP348-349
- 3) 旧亀岡藩学制沿革取調書, 岡村敏雄家文書, 1883
- 4) 文部省編, 日本教育史資料 式, 文部省, P338, 1890
- 5) 前掲書1), P263
- 6) 小林善仁, 亀山城下絵図の景観年代一新収絵図を中心に, 第26回特別展 光秀 亀山城 城下町, 亀岡市文化資料館, PP86-93, 2010
- 7) 亀岡市文化資料館編, 第26回特別展 光秀 亀山城 城下町, 亀岡市文化資料館, P40, 2010
- 8) 亀岡市文化資料館編, 第30回特別展 ふるさと亀岡のお城 平城・平山城・山城・城館, 亀岡市文化資料館, P1, 2015
- 9) 前掲書1), P286
- 10) 前掲書7), P60
- 11) 前掲書1), PP281-284
- 12) 前掲書7), PP54-55
- 13) 前掲書1), P348
- 14) 前掲書1), PP348-349
- 15) 信正公御代記, 亀山藩史料, 亀岡市文化資料館所蔵
- 16) 前掲書3)
- 17) 前掲書3)
- 18) 前掲書3)
- 19) 大石学編, 近世藩制・藩校大事典, 吉川弘文館, P648, 2006
- 20) 大分県教育庁総務課 大分県教育百年史編集事務局編, 大分県教育百年史第一巻通史編(1), 大分県教育委員会, P111, 1976
- 21) 中泉哲俊, 日本近世学校論の研究, 風間書房, PP42-43, 1976
- 22) 前掲書19), P147
- 23) 前掲書21), PP42-43
- 24) 前掲書21), P43
- 25) 前掲書3)
- 26) 亀岡市史編さん委員会編, 新修亀岡市史資料編第二巻別冊, 亀岡市, 2002
- 27) 前掲書26)
- 28) 前掲書3)
- 29) 前掲書19), P648
- 30) 今村嘉雄, 修訂十九世紀に於ける日本体育の研究, 第一書房, PP398-403, 1989
- 31) 前掲書1), P437
- 32) 濱田臣二, 進修館における武士教育, 北九州工業高等専門学校研究報告第49号, P84, 2016
- 33) 前掲書3)
- 34) 前掲書30), P430
- 35) 前掲書32), P84
- 36) 前掲書30), P464
- 37) 前掲書32), P85
- 38) 前掲書30), P466
- 39) 前掲書30), PP463-467
- 40) 前掲書3)
- 41) 綿谷雪・山田忠史編, 武芸流派大事典, 東京コピイ出版部, 1978
- 42) 武術双書, 名著刊行会, 復刻版1992
- 43) 横山健堂, 日本武道史, 島津書房, 復刻版1991
- 44) 同朋舎出版, 日本武道大系, 1982
- 45) 木村礎・藤野保・村上直編, 藩史大事典第5巻近畿編, 雄山閣出版, 1989
- 46) 西山松之助, 家元の研究 西山松之助著作集第一巻, 吉川弘文館, P263, 1990,
- 47) 前掲書46), P285
- 48) 前掲書44), 第十巻, PP43-44
- 49) 濱田臣二, 小倉藩における武道教育, 北九州工業高等専門学校研究報告第28号, 1995
- 50) 濱田臣二, 福岡県における近世剣術流派の一考察, 北九州工業高等専門学校研究報告第31号, 1998
- 51) 濱田臣二, 福岡県における近世武芸流派の一考察 - 槍術・柔術・兵学について -, 北九州工業高等専門学校研究報告第34号, 2001
- 52) 濱田臣二, 福岡県における近世武芸流派の一考察 - 弓術・馬術・砲術について -, 北九州工業高等専門学校研究報告第33号, 2000
- 53) 北村龍象編, 丹波誌 亀岡町 巻四上, 京都府立総合資料館所蔵, 1925
- 54) 濱田臣二・矢野真宏, 中津藩における近世の武芸流派について, 北九州工業高等専門学校研究報告第47号, 2014
- 55) 日本歴史地名大系26, 京都府の地名, 平凡社, 1981
- 56) 衣笠安喜編著, 京都府の教育史, 思文閣出版, 1983

(2016年11月7日 受理)